

| | | | | |
|---------|---|---------|----------|-------|
| 氏名(本籍) | よこ 横 | やま 山 | さとし 智 | (茨城県) |
| 学位の種類 | 博士(理学) | | | |
| 学位記番号 | 博乙第1938号 | | | |
| 学位授与年月日 | 平成15年6月30日 | | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第2項該当 | | | |
| 審査研究科 | 地球科学研究科 | | | |
| 学位論文題目 | A Geographical Study on the Basis for Existence of Mountainous Villages in Northern Laos (ラオス北部山岳地域における村落の存立基盤に関する地理学的研究) | | | |
| 主査 | 筑波大学教授 | 理学博士 | 斎藤 | 功 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 理学博士 | 田林 | 明 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 理学博士 | 手塚 | 章 |
| 副査 | 東洋大学教授 | 理学博士 | 山下 | 清海 |

論文の内容の要旨

本研究は、ラオス北部山岳地域において、集落立地、民族、経済活動の相互関係を空間的視点から分析し、山岳地域における村落の存立基盤を明らかにしたものである。自動車道路へのアクセスを有していないラオス北部山岳地域のルアンパバーン (Luang Phabang) 県にある焼畑地域を研究対象地域として選択し、カムー (Khmu)、モン (Hmong)、ラオ (Lao) の3民族がどのような高度に集落を構え、どのような生業で暮らしを立てているかをフィールドワークによって解明したものである。

まず、研究対象地域で実施されていた生業には、農産物生産、林産物採取、家畜飼育などの農林業活動に加えて、雑貨店経営や農林産物仲介業などの農外活動もみられることを明らかにした。主要経済活動は焼畑耕地における稲作であり、耕地のある標高や伐採前の植生によって稲の品種を植え分けたり、混作する作物の種類を決めたりする人々の知恵や工夫が解明された。しかし、この自給自足的な山岳地域で現金収入を得ている活動は安息香 (Benzoin)、カルダモン、カジノキなどの林産物採取であった。なかでも世界の一部の地域でしか採取できない安息香が最も大きな現金収入源となっていた。安息香は焼畑2次植生のトンキンエゴノキ (*Styrax tonkinensis*) から採取されるため、焼畑と組み合わせられたアグロフォレストリー的な土地利用が実践されていた。つまり、安息香を中心とする林産物採取には5-9年の焼畑休閑期が必要であり、安息香採取が森林資源の持続的利用に結びついていることが明らかになった。一方、モンの集落ではケシ栽培も大きな現金収入源となっていた。

本地域における農外活動をみると、雑貨店経営と農林産物仲介業が約20年ほど前に河川沿いのラオ集落に導入されたことに始まり、その後、後者は河川沿いのカムーの集落、山岳部のカムーとモンの集落へと拡散した。しかし、雑貨店経営、地域外と取引を行う仲介業および2か所の定期市は、河川沿いの集落にのみ導入され、それぞれが後背地の山地集落と市場圏、農林産物集荷圏を形成していた。ここでは林産物採集者が、農林産物仲介者へ農林産物を売って得た金で、雑貨店経営者から商品を買うような、産物と金銭の循環プロセスが解明された。また、ほとんどの農林産物採集者・商品購入者は山岳部のカムーやモン族で、ほとんどの農林産物仲介者・雑貨店経営者は川沿いのラオ族であった。このように農林産物と商品取引には、民

族と集落立地のコントラストが明確に表れていた。

さらに、本地域で取引された安息香などの農林産物は海外に輸出されており、その流れには首都から山岳部の集落に安息香を直接買付けに来る「直接買付け」、首都の輸出業者が他の仲介業者に買取りを一任する「委託買取り」、そして中間都市を経由し段階的に仲介される「段階的仲介」の3つの類型が存在することも判明した。

以上のようにラオス北部の山岳焼畑地域では農業活動が「生産システム」を担い、農外活動が「交易システム」を担っていた。また、「生産システム」は主として山岳部のカムーとモン族によって維持され、「交易システム」に関わる活動は主として川沿いのラオ族を中心に実施されていた。「生産システム」は、それ単独では自給自足的な生産活動に過ぎないが、「交易システム」と結びつくことによって、つまり両システムの補完関係が保たれている状態において、山岳地域の村落が存立し維持されていることが明らかになった。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究の考察は、山道を歩いてGPSとGIS（Geographic Information System）を援用して自ら地図を作成しながら、ラオス北部の焼畑山地集落12村16集落をめぐり、現地語を駆使した世帯ごとの経済活動に関する聞き取りにより収集された一次資料に基づいたものである。その結果、焼畑農業活動に依存するカムー族の集落は山岳地から川沿いまで全域に立地し、焼畑二次林の林産物から収入を得ており、山岳部に立地するモン族の集落は収入をケシ栽培に依存しており、川沿いに立地する半農半商のラオ族の集落は収入を商品取引などの農外活動に依存していることが解明された。本研究は高度別、民族別に異なる集落の焼畑耕作、林産物採取を地生態学的に考察し、焼畑二次林で採取された安息香などの林産物商品を海外に輸出されるまでの過程を社会経済的に論究したものであり、その成果は人文地理学ばかりでなく、境界科学の分野においてもフィールドワークによる東南アジアの地域研究の精華として高く評価されよう。

よって、著者は博士（理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。